

秋田経済新聞に掲載されました

社長長谷川敦のロングインタビューが掲載されています。今回のトラパント通信ではその一部をご紹介します！



何をやるかよりも誰とやるか

一起業のきっかけを教えてください

「4年間だけなのでアシスタントレベルですが、地元の会計事務所経営コンサルタントとして働いていました。起業したのは26歳。8歳のころには会社を作りたいと考えていたんです。現在の社名も小学生のころに友達と作った野

球チーム名「トラパント工業高校」から。私にとって重要なのは、「何をやるかよりも誰とやるか」ということでした。そのため、創業メンバーをスカウトするところから始めたのです」

一創業メンバーのスカウトとは？

「当社専務の奈良真は高校時代の友人ですが、進学で県外に出たので秋田に連れ戻そうと計画を立てました。地元の就職情報を提供するなどUターン支援(笑)。今も一緒に働くのは私も含めて夏井麗ら3人ですが、当初4人で起業しました。思えば、10〜20代から今の組織づくりの準備を始めていましたね」



反対されることは成功する

一事業分野はどのよう
に決めたのですか？
「『屋台村』や『クリーニングFC』店の経営など前職時代に数十件の事業計画を立てていました。創業メンバーで検討を重ねて、『ホームページ制作代行業』と『おにぎり店』に絞りましたが、『おにぎり店』に絞りましたが、ネットの活用は必要だろうと制作代行業に決めました。あと、『やつぱり』からは『ITだよなあ』という雰囲気もあって(笑)。今では『ウェブプログラクシ』のような言い方も一般的ですが、当時はまだ適当な言葉がなかったのでも『制作代行業』。新しい事業分野で競合が少なかつたこともあり、地元の伝統ある企業に出向いても営業しやすかったです。例えば、『自動車販売業』などは難しいだろうと」

一長谷川さんは地元志向が強いようです
「私は大学まで地元の学校でしたが、ほとんどの同級生が進学就職で県外に出ていきました。高校卒業時には、県外に進学する友人を見送りに行っていました。すると、日に日に見送る人の人数が少なくなっていくのです。とうとう最後には私だけになってしまいました(笑)。それは寂しかったですよ」

一東京への憧れのようなものは
ありませんか？
「なかったですね。理由はありません。私が秋田に『たわて』にいるのは、誰でも持っている郷土愛、人間の本質的な欲求だと思います。シリコンバレー行つたときに気が付いたのですが、世界的なIT企業を見渡してみても、故郷で仕事を始めた経営者は多くいます。地元から世界を見ることができているのです。日本だけが東京にしか残っているように感じます。地方でも、若くても、お金やその他のリソースがなくとも、会社を立ち上げて成長させられるんだということを今の会社で証明したいのです」



天才的なバランス感覚を磨け

一事業計画の立案や実施はどのようにしていますか？

「私はプロジェクトマネージャーではないので、個々の事業計画を立案することはありません。これまでで私が立ち上げた事業は『イーストベガス推進協議会』(カジノを含む統合リゾート推進事業)ぐらいですね。社内事業のほとんどは社員が担っています。社員の成長のためにも信頼して任せなければならぬと思っています」

一アドバイスを求められたときはどうしますか？

「社内のプレーンディング(集団でアイデアを出し合うこと)にも一切参加しないんですよ。あくまで社員が考え、結果の報告だけを受けます。もちろん、それが事業としてバランスを欠いた内容だった場合には止めます。私はリアリストですから、夢レベルのアイデアにインテリジェンスの要素を加える作業、アイデアの暴走を止めるのが私の仕事ですね。社員にも『天才的なバランス感覚』を磨くよう伝えています」

さらに詳しい記事が秋田経済新聞に掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://akita.keizai.biz/column/18/>

